

漱石『三四郎』矛盾

Junko Higasa 2016.10.19

大学構内の池のほとりで遭遇した女（美禰子）が三四郎を一目見た。三四郎は慥かにその黒目の動く刹那を意識し、そこにある何とも言えない或る物に出逢った。その或る物は汽車の女に『あなたは度胸のない方ですね』と言われた時の感じと似通っている。三四郎は恐ろしくなった。そしてその女が自分の前を通り過ぎたとき、白い花を落として行った。見ると髪にも白い薔薇を挿している。三四郎は呆然としながら『矛盾だ』と小声でつぶやいた。

何が矛盾か？名古屋の女は、戦地に行った夫と音信不通で、子供を抱えて生活に困っている「妻」である。池のほとりの女は、華やかな着物と高価な染めの帯を身に着けた「娘」である。漱石の作品には「結婚すると女は変わる」という伏線がよく出てくるが、この場合、異質なはずの「妻」と「娘」が、三四郎に同じ感覚を与えるというのが「矛盾」なのである。花の「白」に象徴される処女性により、恋愛において男に対するひたむきさを発揮する「娘」が、男との生活に慣れた妻であり母である女同様の感じを与えるのが「矛盾」なのである。学問の世界ではあり得ない矛盾である。従って三四郎の学問は「女」において豪も役に立たない。しかし三四郎はそれに気付かず「矛盾」を解こうとした。それが「美禰子と斯様に会って、斯様に別れた」経験である。